

平成27年10月9日  
一般社団法人日本自動認識システム協会  
研究開発センター 酒井

## 第2回 生体認証を用いた被災者支援システムの研究開発検討委員会 議事録

1. 日時：平成27年9月29日 10:00～12:00
2. 場所：一般社団法人 日本自動認識システム協会（JAISA） B会議室
3. 次第：

1. 開会の挨拶	事務局	10:00～
2. 配布資料の確認	事務局	10:01～
3. 議事	半谷委員長	
1) 委員長挨拶	半谷委員長	10:02～
2) 第1回委員会議事録確認	事務局	10:04～
3) 委託調査見積り結果報告（口頭）	事務局	10:10～
4) 委託調査(被災者支援システム側)WGに係る報告	吉田委員	10:15～
5) 委託調査(連携および生体認証側)WG報告	齋藤委員	10:50～
6) その他	事務局	11:40～
5. 事務連絡	事務局	11:50～
1) 今後の日程		
2) 写真撮影など		

### 4. 出席者：(敬称略)

#### [委員]

- 半谷精一郎 東京理科大学
- 寶木和夫 国立研究開発法人産業技術合研究所
- 吉田稔 西宮市情報センター
- × 南晴久 西宮市情報センター
- 清水光俊 川口市
- 佐藤学 川口市
- 村上秀一 株式会社日立製作所
- 齋藤雄一郎 富士通株式会社
- 塙俊浩 日本電気株式会社
- × 中村敏男 株式会社OKI ソフトウェア
- 平岡良彦 セコム株式会社
- 鷺宏行 株式会社NTTデータ
- 平野誠治 凸版印刷(株)

#### [オブザーバ]

- 高田直幸 セコム株式会社
- 山田徳幸 日本電気株式会社

- 齋藤訓 株式会社日立システムズ
  - × 加藤誠司 経済産業省
  - × 中山和泉 経済産業省
  - × 島方光治 株式会社NTT データ・エム・シー・エス
  - 上出和明 株式会社NTT データ・エム・シー・エス
  - 野口武彦 株式会社NTT データ・エム・シー・エス
- [事務局]
- 酒井康夫 (一社)日本自動認識システム協会

## 5. 配布資料

- 資料1: 第2回生体認証を用いた被災者支援システムの研究開発検討委員会アジェンダ
- 資料2: 平成27年度生体認証を用いた被災者支援システムの研究開発検討委員会名簿  
(修正版)
- 資料3: 第1回生体認証を用いた被災者支援システムの研究開発検討委員会 議事録 (案)
- 資料4: 生体認証を用いた被災者支援システム構築のための調査に係るWG報告
- 資料5: 第2回連携及び生体認証側WG議事録
- 資料6: 生体認証を用いた被災者支援システム構築のための調査計画について

## 6. 議事内容

### 1) 開会の挨拶と委員紹介

(一社)日本自動認識システム協会(JAISA)事務局より、委員変更について説明があった。  
開会の挨拶があった。

### 2) 委託調査見積り結果報告 (口頭)

見積り締切りまでに、被災者支援側は株式会社システムエージ様から、また連携および生体認証側は、株式会社日立システムズ様とNEC様から応募をいただいた。

それぞれJAISAにて検討をした結果、被災者支援側は株式会社システムエージ様に、また連携および生体認証側は日立システムズ様に委託することを決定した。  
今後両社で調査を進めていただくことが報告された。

### 3) 前回議事録確認

事務局より、資料3を用いて、前回議事録の確認があり承認された。  
(詳しくは、資料3を参照のこと)

### 4) 委託調査(被災者支援システム側)WGに係る報告

吉田委員より、資料4を用いて、委託調査(被災者支援システム側)WGの説明があった。(詳しくは、資料4を参照のこと)

被災者支援システムの運用サイドから見た利用シーンと希望する仕様について質疑され、資料の内容に加え、下記についての委員の理解が深まった。

- ・避難所の職員が、一緒に逃げてきた人などに聞いても、どうしても誰だかわからない避難行動要支援者が誰であるかを判断するために使うことを考えている。
- ・候補者を何人も持ってきて、時間がかかろうが本人を特定することが大事。間違える可能性を含む1人を提示してもらいより、判断に10秒かかってもいいので、候補を何人が提示してもらって、職員が最終判断することで良い。
- ・候補の中の誰かというのは遠観で判定できる。実際の職員がそれでやる。今後はマイナンバーが入ってくるので、マイナンバーから個人情報の顔、写真情報が自動的に出てくるようにできる。また、特に危機管理において、自治体は個人情報を自在に使えるので、顔写真で判断することは実現できる。

また、連携および生体認証側として次の課題があることが明確になった。

- ・複数人の候補を返すという機能は、現在生体認証の機能として使われている照合機能というより、検索機能になるため、実現策についての検討が必要である。  
(あるベンダーの標準パッケージではこの機能はカバーしていない。また、あるベンダーはパラメータの変更で可能であるなど、ベンダーごとに異なっている。)
- ・また、複数人の候補を返すという機能は、個人情報の提供にあたる懸念もあり、その検討が必要である。
- ・複数人の候補を返す機能の実現の際に、一例として出てきたブロック分けして実現する場合、ブロックの中で類似度が1位でないところに実際の人が入った際に、その方が排除されないようすることを考える必要がある。
- ・被災者支援システムの要求仕様の実現を考えた時、SDKを用いて実現する機能も含めて考えていかないといけないと考えている委員もいる。そのため、複数ベンダー向けの標準インターフェースとして、複数の生体認証装置やベンダーが接続できる仕様を実現する際に、ベンダーによって接続する装置の捉え方が異なるため、どこで何を標準にするかについて検討する必要がある。

<質疑応答等>

質疑応答の詳細は、別紙の質疑応答録を参照のこと。

## 5) 委託調査(連携および生体認証側)WG報告

齋藤(訓)委員より、資料5・資料6を用いて、委託調査(連携および生体認証側)WGの説明があった。(詳しくは、資料5・資料6を参照のこと)

委員長より検討と議論を進める上で、現状の制約の中で現状あるものをどう使って実現しようかという議論ではなく、被災者支援のときに何が必要かを理解して、実際に現場で使えるものを作るためにはどうあるべきかという視点で検討を進めなくてはならないとの指摘があった。

本プロジェクトの目的としていることと被災者支援システムの現場希望事項を踏まえて、検討している対象を分けて今後検討と意見交換を進めることが提案され、それを踏まえて今後調査を進めてゆくこととなった。

- ①本来あるべき姿
- ②プロトタイプとして実現する姿

<質疑応答等>

- いきなり SDKではじめるよりも、標準で何ができて何ができないのかを明らかにした上で、ビジネスにしたほうがよいのではないかと。
  - 被災者支援システム側としては、検索で候補者をできるだけ出してもらい、担当者が判断することが実務側としては実現してもらいたい。実運用向きにしてほしい。
  - SDKでなくても、各社作りが違う場合があるので、仕様の実現を各社がどう行うかは各社で考えればよい。そのような余地を残した標準とするよう検討してほしい。
- 事前絞込みがない状態で生体認証システムで候補がでるようにしたいという要望なので、それをどう実現するかを考えないといけない。
  - 標準のAPIや製品にこだわらずSDKも含めていいと各社の意見があれば、検討する。制約もあるので、できあがったものを開示できないこともある。
  - 制約やルールで物事を決めてはいけない。国民を守るシステムを作るのだから、必要であればルールを変えていくということまで広げて検討することが必要だ。
- 類似度は出さないのか。
  - 類似度を出すと脆弱になるのではないかと。
  - レジデンス用にはあまり設計されていないので議論が必要。セキュリティ上の脆弱性は生じる。
  - 住民の生命と財産を守ることが目的で、人の命を守る場合は縦横無尽に使えなくてはならない。ここで使うのは、住民のための危機管理に役に立つためという視点で取り組んでもらいたい。
- 見積りするときの前提条件であった部分が、プロトタイプ仕様として実現が要求されると開発者は苦しい。歩み寄りが必要だ。
  - 今回の議論はプロトタイプをどう作ろうかという部分と、最終的に製品化してどうするかという2つの議論が混在している。プロトタイプを作るところの範囲としてどこまでやるのかという議論をした上で、将来各社製品としてアップデートする時にどこまでやるかは各社の判断かと思う。議論がかみ合っていない気がする。
  - 最終製品としては、類似度をパラメータを含めて表示されるのがベストだろう。技術的にはできるが、お金と時間がかかる。
  - プロトタイプシステムでは連携機能は外出しにして、被災者支援システム側のインターフェースは共通化してひとつにして、各社のシステムと連携させることを考えている。本来あるべき論で話した時には、3社の技術を使ってこの連携機能が生体認証側に入っていくと想定した。
  - 本来あるべき姿では、被災者支援システム側のインターフェースはこうですという形で各社の最終的な製品を供給することになるんだろうと今までの議論で理解をした。
  - 今回のプロトについては今あるものでどこまでできて何をしなくてはいけないかを明確にするために、本来あるべき姿と分けた上で線引きをしてプロトタイプシステムをある程度の時間とコストの中で作って評価しようということを提案することを考える。
- 実証では、実際に西宮市のデータを使わせてもらって本当に要支援者で行うのか、市の職員で行うのか。
  - 情報部門全員のデータベースにするのが一番楽。関係者は60人程度いる。

- ・被災者支援システムは無料だが、オプションの生体認証が高額になると使えない。
  - 安いほうがいいだろうが、生体認証を使って必ず本人を導き出すことが大切だ。
  - 現場で最終判断をするための検索システムで、あくまでも参考データがほしいのでは。
  - 有事のときはうちの製品を無償で使ってくれ、という話にはならないのかな。
- ・絞り込みをするときに、すでに避難所のいる人だというような、各避難所のDBをとうごうした一元管理はできているのか。
  - 庁内ネットで情報は繋がっている。
  - 本来、生体認証システム側でもチェックイン済だとフラグをもてればいいが、マスタなのでたえず更新していくことが難しい。チェックイン済の人をバッチでとりこんで、母数を減らすという工夫はしやすい。その場合は、解除のマスタメンテをどこでやるか検討が必要だ。
  - 将来の課題として最終的なインターフェースを定義する。
- ・プロトタイプングをしていく上で、BioAPI と OpenID の位置づけは制約として考えない方向か。
  - 1:n 認証で候補者を出し、かつスコアがでることが一番望ましい要件事項。
  - OpenID にこだわるとシステムの制約がかかるため、今回は考えないほうが良い。
  - 各社が対応できるようにするため、どこを標準インターフェースとするかを検討して、それを決めるということに取組むのが良い。
- ・今回の検証実験では、VPN環境をお願いするのはなしか。
  - 試験的なシステムを作りましょうという予定ですから、二次的な物については極力避けてVPNは次の問題として捉えていいのではないか。

質疑応答の詳細は、別紙の質疑応答録を参照のこと。

#### 6) 次回以降の予定等 (仮)

- ・第3回委員会：12月15日(火) 13時～15時
- ・第4回委員会：平成28年3月上旬

以上